8 きょう土のはってんにつくす

●きょう土のはってんのために、昔の人々はどのようなことをしたのでしょうか。

加茂井取り入れ口と七つ石（鴨神社）
加茂井の水を栄根村に分水するときに、水量調節するために置かれた七つの石です。

小戸井取り入れ口（滝山付近）
加茂井の取水のため、猪名川ぞいの小戸に木製の水門がつくられていました。

つかむ

昔の人々は、住みよいきょう土をつくるために、どのような努力をしてきたのでしょう。

「石がならんでいるよ。門のようなものもあるよ。何だろう。」

「いつごろできたのだろう。鴨神社にほぞんされているものは、古いものみたいだね。」

「川の水を引きこんでいるね。川の水を何に使うのだろう。」

だいきさんたちは、ふしぎに思ったことや知りたいことを話し合い、調べることにしました。

用水路について書かれた石碑（小戸）
川西能勢口駅周辺の再開発でなくなった用水路について書かれた碑です。

水利組合の石碑と分水石（久代春日神社）
加茂井の水を久代村の周辺の田に、公平に水が流れるように置かれた石とその碑です。

1 新田の開発

1580年ごろ、久代村（川西市）と神田村（池田市）の人々は力を合わせて新しい田を開きました。これが久代新田です。

この久代新田をはじめ、60年ほどの間に、石道・寺畑・山下・出在家・小戸・東畦野・栄根などの村で次々に新しい田がつくられました。

これらの村のほとんどは、米のほかに畑でわたをつくっていましたが、もっと米をつくりたいと考え、用水路をつくって畑を水田に変えたり、新田を開いたりしました。

調べる

どうして新しい田がつくられたのでしょうか。

新田

新しく土地を切り開いてできた田のことです。

2 用水路の建設

調べる

どうして用水路はつくられたのでしょうか。

小戸井、加茂井、最明寺川水路図

農作物をつくるために水は欠かせません。そのため、昔の人々はため池をつくり、その水を利用していました。しかし、田畑がふえて水が不足するようになったので、猪名川のゆたかな水を利用することを考えました。

1700年ごろ、猪名川ぞいの滝山あたりに水の取り入れ口をつくり、出在家から火打・寺畑まで約２kmの水路をつくることに成功し、田畑に水が送られました（小戸井）。

また出在家のあたりにも取り入れ口をつくり、栄根・加茂・久代・伊丹市へ水を送る約６kmの用水路をつくりました（加茂井）。

このようにしてつくられた用水路によって、切り開かれた田畑には、作物がゆたかに実るようになりました。

この用水路は、今も農作物をつくるために利用されています。

川から水を取り入れるところだったんだ。

今の加茂井（小戸神社のあたり）

昆陽池

深山池

3 一庫のほりぬき隧道の建設

710年ごろ、行基というおぼうさんが米づくりのために、日本各地にため池をつくることを進めました。川西市のとなりの伊丹市にも昆陽池をはじめ多くのため池があります。

一庫でも、大きなため池が数か所つくられました。その主なものが深山池です。その深山池から約１kmの用水路を引き、一庫で農作物がつくられていました。

しかし、この用水路は、大雨や地しんでくずれたり、動物にあなを開けられたりして、村の田畑まで十分に水がとどかず、また、日照りや水不足になやまされ、農作物がとれないことがたびたびありました。

調べる

隧道をつくるために、どんな苦労があったのでしょうか。

ため池

田で使う水や消火用の水をためておく池のことです。

隧道

トンネルのこと。

隧道の位置

一庫にある顕彰碑

村人たちは、水の心配をしないですむようにと、1500年ごろには、ほりぬき隧道をつくる計画を立てましたが、費用がかかることなどの理由からなかなか工事を行うことができませんでした。しかし、1807年、ついに隧道の工事がスタートし、約40年の年月をかけ、1846年、直径１m長さ800mの隧道を完成させました。

一庫には、この隧道以外にも大小いくつもの隧道がほられています。

隧道完成後、村では水番をおき、村人が勝手に用水路を変えたり、水を水田以外に利用したりすることが禁じられていました。

今も地いきの水田に公平に水を配分する作業が水利組合で続けられ、米づくりが行われています。

また、一庫の村では、ほりぬき隧道をつくるために努力した人々をまつる顕彰碑が建てられています。

隧道は、田畑に水を送るものだったんだね。

まとめる

昔の人々の願いや努力をまとめましょう。

川西市　歴史の散歩道

多田銀銅山と炭づくり

多田銀銅山は江戸時代の初めごろに最も栄えました。山下や下財には、さいくつした石にふくまれる銀や銅をとかして取り出す、製錬所がありました。

今も黒川の炭づくりは有名ですが、川西市北部では、豊臣秀吉の時代のころから炭づくりがさかんでした。

江戸時代の川西市は、当時の政府である江戸幕府の領地でした。多田銀銅山を管理するために山下と銀山（猪名川町）に役所がつくられたほか、年貢（税金）としてお米のほかに炭もおさめていました。

川西市郷土館

製錬所で使われた当時の道具がてんじされています。

平野水

能勢電鉄平野駅の北400m。天然の炭酸水がくみ出されては、びんづめにされ、全国はもとより、海外にまで広く出荷されていたゆかりの地です。温泉として利用されていたこともありましたが、1881年、飲料用としても使うようになりました。今はすがたを変えて「三ツ矢サイダー」として、多くの人に親しまれています。

平野にある三ツ矢とう